

月刊 オパリン王国

2011年



序文

みなさんこんにちは、オパーリンです。今月も無事『月刊 オパーリン王国』をみなさんの手元に届けることができ、嬉しく思います。『月オパ』は今月号（１２月号）で早くも創刊から第三号になり、ほんの思い付きから始めたこの雑誌が細々ながらも続き、少しずつでも広がっている（のかな）と思うとただ素直に嬉しく、また今後を思いワクワクしています。

さて、お決まり調の挨拶はこれでお終いにして、今月号の内容を少し紹介して序文とします。

まず、今月号から新しい執筆者が記事を書いてくれました。多良鼓氏、ゲーム、アニメについての批評的な記事です。僕の感想も載せました。色々な考えが「混じり合う」それが雑誌の醍醐味だと思いますので、そういう意味でも面白くなってきたなあ、と思います。

次に、先月（１１月号）でも記事を書いてくれた東町健太氏が今月も記事を書いてくれました。相も変わらずの口調、文体で、楽しめました。来月は何が出てくるのか、今から楽しみです。

僕の記事について、今月はちょっと重めの記事が多くなったかなと思っています。まあ、評価は読者のみなさんがする事なので、お任せします。

では、『月刊オパーリン王国 １２月号』をお楽しみください。

オパーリンヶ月（日記より）

オパーリン国王の動静。これを読めば王国全体で何が起こったのか、分かるでしょう。

・ 2011年11月25日

「毎日新聞記者と語る会」に参加。W大学の学生が常套句的な原発報道批判（マスコミは御用報道に成り下がった的なやつね）を行い、記者の人がマジギレ。「（成り下がったのは）何月何日のどの記事ですか？」的な反撃を食らった。僕は「（W君は）どうやって返すのかな、面白くなってきたな」と思っていたのだが、記者の方が切れたのにビビってしまったのか、その後W君は素直に謝罪していた。

「報道の姿勢」という、趣旨としては多くの人が感じている（多分記者自身も感じている、また感じてほしい）疑問だっただけに、もうちょっと何かやり方が無かったかな、そうすればもっと面白く、多分有意義な議論に発展しえたんだろうな、と少し残念に感じた。僕自身は得意の「山谷からの社会保障問題質問」を社会部、政治部の記者の人に聞き、お決まりの「難しいけど頑張るしかない」的なお返事を頂いた。安全圏から出ないやり取り、という感は否めなかったな。ただ、この会の評価すべき点としては、他の新聞社の説明会、インターンシップと比べて、学生との質疑応答の時間が非常に長かった。長い、というよりは会のほとんどの時間をそれに費やしていた。返答の質は置いておいても、その姿勢は素直に評価できる。

会終了後、物販に来ていた主催者である「創出版」の社員の人に名刺をもらい、後日、新聞業界についての質問をメールした。丁寧に返事を下さり、実はこちらでのやり取りの方が僕にとっては有意義であった。しかし、創編集部の方のお返事は「あくまで個人的な意見」という事なので、ここに載せることは差し控えておく。まあ、トピックとしては「新聞の公正中立という主張への懐疑」「山谷、釜ヶ崎を報道する意味」「価値観が多様化する現代における「マス」とは誰の事を指すのか」的な事について聞き、答えてもらった。

・ 2011年12月2日

創出版主催の「講談社訪問」に参加。ミクシイのコミュニティで募集があり、参加した。比較的少人数での訪問だった。漫画担当の編集者の方と、ノンフィクション担当の編集者の人（二人）が対応してくれた。みなさん、型にはまらずあまり社員っぽくない感じの人だった（あ、ノンフィクションの片方の方は真面目そうだったな）。僕はノンフィクション担当の方に「週刊誌とかをしていると、ノイズマイノリティーの人達に訴えられたりする事もあると思うんですが、そういう時は戦うんですか？それともめんどくさいから謝っちゃうんですか？」と質問。それには「自分が正しいと思う時は戦います。」と答えて下さり、嬉しくなった（自分が闘争している気分になり、ウキウキした）。

少人数だったので、「一問一答」ではなく、「やりとり」の発生する質疑応答ができ、とても楽しかった。はっきり言って、一問一答は殆ど議論にならないからなあ。

・ 2011年12月3日

大学の同級生らと飲み会。「月オパ11月号」をばら撒いた後、痛飲。セクハラを繰り返し、帰宅。

・ 2011年12月4日

金欠の為漫画とゲームを売り払う。1万3千円位にはなったかなあ。友人と一緒にワングーとブックオフを廻ったのだが、その時友人に「俺は漫画とゲームは売っても、本は絶対に売らないんだぜい」と、聞かれてもいないのに自分の哲学を教え諭していて、三浦哲郎の『忍ぶ川』を思い出した。

『忍ぶ川』は、愛する女と結婚したにも関わらず、文士志望で働かず、拳句に小説は一文字も書けない、というダメ人間の恋愛小説である。大好きな小説の一つで、今まで読んだ恋愛小説の中では断トツ一位である。その中に金が無くなり本を売って暮らすうち、本棚がスカスカになっていくという描写があって、その一節を思い出したのだ。で、一人勝手に妄想モードに入り、感傷に浸り、友人を置いてけぼりにしてしまったのであった。

・ 2011年12月5、6日

国会中継を楽しむ。月、火曜日は新聞社に入る為の勉強をする日という事を研究室と取り決めてあるので、朝から真面目に国会中継を見た。みんなはあれをじっくりと見た事はあるかなあ。実はなかなか、ハマっちゃうくらい面白い。この国の行く末を決定する人達の話しあいだとは信じられない程に低レベルで、滑稽極まりないのである。野次などは下衆極まりない。

僕が彼らに言いたいのは、まずは議論の約束を守れ、という事である。高校のディベート部とかに勉強させてもらいに行った方がいいと思う。人の話を最後まで聞く、遮らない、聞かれている事に対して答えてから自分の意見を言う、これらの基本中と基本とも言うべきルールが守れないのである。あれでは議論が進展する筈もない、させる気なんてないのかもしれないが。

ただ、中には非常に頭が良い人もいて、彼らがおバカを論破する様は痛快である。ただ、バカに囲まれてウンザリしているんだろうなあ、と同情を禁じ得ない。

あと、野田総理に関しては、さっき言ったルール以前の問題である。というよりも彼はルールに関しては（質問に答えるという点を除いて）守れているのである。しかし、それ以前の問題として、日本語が出来ないのである。質問者に何か聞かれても、ガラガラガラガラと意味不明の単語、助詞、助動詞の羅列をするだけで、それが一向に「意味をもつ文」として、頭に入ってこないのである。文学者の難解な文章と似ているかもしれない。文学者はそれでも構わないが、あなたは国民を代表する総理なんだから、一般の人が理解できるように、分かりやすく、簡潔に答えなきゃダメでしょうが。

・ 2011年12月9日

日経新聞「就活オープニングセミナー」参加。つまらなかった、以上。行く途中に産経ビルで喫煙所に行ったら、「ラク」の試供品をもらった。試供品といっても一箱まるまるだったので、なんだかすごく得をした気分になった。実際に得はしているのだが。今度、ハイライトメンソールが売り切れの得にはラクを買ってやろうと思う。

・ 2011年12月11日

「地方紙4社合同記者セミナー」参加。河北新報、信濃毎日新聞、中国新聞、高知新聞の四社の説明会だった。講演では池上彰がやってきた。

まず、池上彰について。講演の内容としては、彼の著書『記者になりたい』のほぼまる写しであった。僕はその本を読んでいたのだから、話の展開まで完全に予測できてしまった。が、話し方（つまり人柄）は予想外であった。テレビで見慣れている「分かりやすく丁寧な口調の池上さん」ではなく「分かりやすく丁寧でありながら、非常に黒い池上さん」であった。テレビ、大手新聞などの悪口を言いまくりであった。特にスポーツ新聞への誹謗中傷は凄まじかった。その上、嫌みの精度というか、切れ味も抜群で、「やっぱり話が上手いなあ」とただ感心してしまった。

地方四社の質疑応答では、僕は「キャバクラ質問」をかましてやった。GWに被災地に行った際、宿泊した松島のホテルでキャバクラが営業していて印象に残っていた事を思い出し、その事について質問したのである。

震災以降、常々感じていたのだが、ちょっと何か言うとすぐ「不謹慎」とののしられ、社会的に抹殺される風潮に対して、僕は非常に違和感を感じるのである。言論弾圧は悲劇以外の何も生み出さないと思うのである。性風俗に対する差別に抗いたいという趣旨から質問した。性風俗に従事する人も、等しく被災したのであり、その人たちの復興も等しく報道するべきではないのか、と質問したのだ。

会場の学生どもは失笑しておった。「あーあ、やっちゃったよ、こいつ。終わったな。」そういう空気である。が、記者の方は真面目に答えてくれた。「うちでは居酒屋の再開までしか書きませんでしたが、他紙では「ストリップ」の再開を書いた新聞社がありました。「やられたな」と思いましたね。私も、そのような被災者の「日常」にそくした報道は必要だと思います。」おおむね以上の様な返答をしてくれた。感激はしないがまあ、合格といったところだろうか。後で調べたのだが、その記事を書いたのは恐らく読売である。インターンで印象が悪かったが、少し見なおしてしまった。エントリーしてあげようかな、なんて少し思ってしまった。

それにしても、この空間に居合せた中で一番お粗末だったのは、失笑した学生、あなた方である。僕は笑われる事には慣れているので、そのこと自体は何も感じない。ただ、一般常識や固定概念でカチコチになってしまっているあなた方の思考力の貧しさ、僕はそれが哀れで可哀想でならないのである。まだ若いのに。この国を良くするためには、まず彼らを変える必要がある。

・ 2011年12月13日

「月オパ11月号」電子版出版。2ちゃん書き込みデビュー。が、DISられてへこむ。

・ 2011年12月14日

大学の駐車場で古くからの国民に遭遇し、「月オパ11月号」の最後の在庫を配布、完売御礼となる。増刷しなければ

。

「とろろアクメは本当に痒いのか、気持ちいいのか」執筆者オパーリン

このコーナーでは、散文、雑文を載せていきます。

・「とろろアクメは本当に痒いのか、気持ちいいのか」

執筆者 オパーリン

先日、面白いＡＶを観た。ＳＯＤクリエイト「絶頂とろろ地獄」である。内容はタイトルから想像されるものそのまま、「肌に付くと痒くなってしまうとろろを体中に塗りたくったらどうなるのか？」という人体実験である。作中の解説によるととろろの痒み成分は「サポニン」という物質らしい。

そういえば、僕の研究室にミシマサイコという漢方薬の研究をしている人がいて、その薬効成分は「サイコサポニン」だった気がする。何らかの関係があるのだろうか。もしあるなら、とろろも、とろろアクメも健康には良いのかもしれない。

気になったので、ちょこっとウィキってみたが、やはりサイコサポニンはサポニンの一種であるらしく、サポニンの語源はシャボン玉のシャボンと一緒にあってさ。泡立つんだって。

しかし、作中の解説は誤謬で、とろろの痒み成分はシュウ酸カルシウムという物質で、サポニンは逆に痒みを抑制する抗炎症効果があるらしい。で、シュウ酸カルシウムが痒みを引き起こすのは、結晶が針状になっていてそれが刺さるかららしい。アクの成分で皮をむいたり擦ったりすることで組織が破壊されるとシュウ酸カルシウムが皮膚を刺激するらしい。

諸説諸々で意見が分かれているが、ここでちょっとひらめいた。僕なりに整理し、新たな仮説を打ち立ててみる。

サポニンは石鹼様の発砲作用を示す物質の総称。界面活性作用があり細胞膜を破壊する性質がある。シュウ酸カルシウムは痒み成分である。針状の結晶が刺さって痒くなる。で、ここからが僕の仮説なのだが、トロロの場合、この二つの成分が相乗効果となって痒みが増すのではないだろうか。つまり、サポニンが表皮組織を破壊し、痒み成分のシュウ酸カルシウムを皮膚のより一層奥まで浸透させてしまう、という理屈である。

いや、案外筋通ってるぞ、我ながら。思いがけず頑張ってしまった。科学的説明はここまでにしておこう。

ここからは、とろろとエロ（ＳＭ）の関係性について考えていく。実はこの「絶頂とろろ地獄」、ただのオモシロ企画ではなく、歴史的由緒あるプレイなのである。で、製作者たちも当然そのことは知っていると思われる。となると、この作品は伝統的なＳＭからインスパイアを受け、その要素を残しつつ、ポップ（大衆作品）に再構成した意欲作であると考えることができる。

僕がとろろプレイを知ったのは、故団鬼六先生の「鬼百合峠」においてである。鬼畜どもがとろろや唐辛子を混ぜたものを責めの媚薬として使用している描写があった。また、同作品には「ずいき」なるものも責め具として登場しており、僕は「何だろう、ずいきって？」と不思議に思っていた。

今回の執筆の為に調べたところ、ずいきは「芋茎」と書き、サトイモやヤマイモの葉柄なんだそうだ。つまり、原理は一緒なんだね。「肥後ずいき」は熊本県伝統の性具として、肥後細川藩が江戸幕府への上納品として定め、大奥などで愛用されていたそうだ。通称「こけし」。写真見たけど、縄で編んだ棒、って感じだった。お湯に浸して柔らかくしてから使うらしい。

今回はこの位でお終いにしておく。書いていて感じたのは、先人が沢山いらっやって恐れ入った、ということである。ちょこっとネットで検索すると、出るわ出るわ。人のエロへの探求心はたくましい限りである。僕もエロに魅せられた者の端くれとして、日々精進しなくては、と襟を正される思いであった。

「クリスマスラブ」執筆者 東町健太

・「クリスマスラブ」

執筆者 東町健太

寒さも厳しくなり、2011年も終わりにさしかかろうとしている今日この頃、街は華やかなクリスマスのイルミネーションに華やかに彩られている。つい数ヶ月前までは節電だのエコだのと騒ぎ、普通に冷房を効かそうものなら非国民のような目で見られたのが今となっては嘘のようだ。それでも健気に暖房の設定温度を下げる、不要な電気を消す、などのたゆまぬ努力、我慢をなさっている方もおられるだろう。しかしそういう方々よりも暖房をがんがん効かし、部屋や家の周囲を不要な灯りでまばゆいばかりにピカピカさせてゲラゲラ笑いながら生活している人たちの方がどう見ても楽しそうであり、「節電？しらねえよ。」と思うようになるのも無理はないと思うし、明るく楽しく日々を過ごしたほうがいいに決まっている。節電とかめんどくさいし、もういいんじゃない？と誰もがおもっているんだろう。いくらそう口にしないでやっтерことはみんなもうすでにピカピカだし。でも一応「頑張ろうニッポン」とか「絆」とか言っちゃうのが今風でいい感じなんだと思う。

さて、そんなクリスマスシーズンな時期であるわけだけれど、クリスマスといえば街がカップルであふれかえる時期である。新宿なんかだとそんなカップルたちに大音量で「イエスを信じないと地獄におちます！」的な辛気くさすぎることをがなりたててる香ばしい団体とかもいるわけだけれど、街がこれだけ華やかな感じだとそりゃあ恋人たちも仲良くなるに決まっている。クリスマスは一年でもっとも恋が発展する時期だといっても過言ではないと思う。いいことだと思う。順調だと思う。

しかしよく考えてみたらそんなに順調なことばかりでもない。物事にはなんでも表裏ってものがあるんだよ、というのは誰しも知っていることだと思う。たくさんの恋が発展するこの時期というのは裏を見てみるなら、一年でもっともHIV感染者が増える時期でもあるといえる。

「あのさあ、花子。そういえばちょっと聞いてもらいたいことあんだけど。」「なあに、太郎？」「俺さあ、ぶっちゃけエイズなんだよね（笑）」「はっ？？」

こんな会話が数ヶ月後には日本全国いたるところでかわされることになるのだ。この恋人たちの行く末は考えたくもない。

ちなみに真面目な話、エイズ感染の拡がりを防ぐために無料エイズ検診などを行っている自治体もすくなくない。いい活動だと思う。頑張ってほしいと思う。しかしこの検診、たいてい平日の昼間におこなっており、普通に勤めている会社員の方々は検診をうけることができない。じゃあっていつて夜間でもやってる街の性病科とかいくと結構いい値段がとられたりする。性病検査には保険きかないからね。かかっているかどうかわからない病気にそんな金をはらうヤツはそうはいない。エイズ感染拡大をふせぐんだ！とか国は言うけどやってることを見たら「貧乏人と会社員がエイズ検査なんてうけてんじゃねえよバカが」って本音では思っているようにしか見えない。それでも無理に会社員が平日の無料検診にでかけるとしたらどうなるだろうか？

「山田君、明日の会議の件なんだけど」「あっ俺明日有給で休みなんすよ」「あ、そうなの？なんか用事でもあるの？」「明日はエイズと梅毒と淋病の検査にいきますが何か？」「あ…そ、そう…わかった」

これでは彼の今後の会社生活が危ぶまれる。上司もリアクションとれないだろう。

ただ、HIV感染者数は確実にふえてきているとはいえ、現代医学の進歩でHIVに感染してもエイズ発症をかなりおくらせることはできるようになってきているらしい。だから今でこそHIV患者はそれをひたかくしにしているが今後、HIV患者であることを普通に公表し、普通に社会で生活するようになる人も出てくるのではないだろうか。社会の中でHIVが普通にあることのようになる世の中になるのだ。そういった社会の変化にもっとも影響を受けやすいのが子供たちである。昭和年代のアニメで子供たちの囁し言葉として「お前のかーちゃん、でーべーそーっ！」というのがあったが、これからのアニメでは「お前のかーちゃん、えーいーずーっ！」というのがでてくるかもしれない。

クリスマス。この時期になるともう一年も終わり。今年もいろいろあったけれど来年はいい年になればいいなとねがっています。

~~~~~

(↑オパーリンの感想)

言文一致という言葉があるが、東町健太氏はまさしく言文一致な男である。会っても、殆ど会っている間中この文章

に書かれている様な悪態をついている。彼は正直な男なのである。その分、世間一般にまかり通っている「嘘」に対する感度が非常に高い。

節電、エイズ、人々が世の中で「大変だ大変だ」と騒いでおきながら、誰もそれを「自分たちの日常の延長線上にある問題」としてとらえない、行政の対応もまた然り。彼はそう言った「嘘」に怒っているのである。

エイズの話で言えば、僕と東町氏はこの二年、新宿二丁目で行われているゲイの祭典「レインボー祭り」に参加している。誤解しないでいただきたいのだが、僕も彼もノン気である。そのレインボー祭りでは「風船募金」的な催しをおこなっていて、募金をすると風船をくれる。そこで集まった資金はエイズ対策のために使われる。で、お祭りのクライマックスではみんなでその風船を空に放るのである。また、祭りの間、通りでは（恐らく）ゲイバーの店員さん達がコンドームを配っている。

ここから何が言いたいのか、というと上手く言えないのだが。僕や東町さんとゲイの人達は関係あるのかといえ、直接の関係はないかもしれない。でも、じゃあ何も知らなくていいのか、といわれればそうでもないんじゃないか。という事が言いたいのである。

彼のように、「嘘」に対して鋭く怒れる人の「視点」を見過ごしてしまうのはもったいない。来月は何に怒ってくれるのか、楽しみに待つ事にする。

# 「「没個性」が生み出したトップアイドル」執筆者 多良鼓

・「「没個性」が生み出したトップアイドル」

執筆者 多良鼓

アイドルマスター、通称「アイマス」というゲームをご存じだろうか。複数のアイドル候補生から担当アイドルを選び、トップアイドルへと導くという内容のゲームである。アイドル候補生は初代アーケード版（※1）では9人。ゲームのキャラクターだけあって、非常に個性的な子ばかりである。しかしこの9人の中で、アイマスファンから「没個性」というあだ名をつけられてしまった子がいる。それが、メインヒロインの天海春香である。

メインヒロインであるがゆえに能力は平均的、性格もいわゆる良い子、突出したエピソードもなく、容姿も頭のダブルリボンが特徴的という程度である（それ故に「リボンが本体」などという冗談もある）。さらに、アーケード版からXBOX360版（※2）に移植された際、新キャラの星井美希にメインヒロインの座まで奪われてしまった。ここまで見れば、没個性の不遇であるだけのキャラ、というように見える。しかし春香はその没個性さ故に、その後起こった大ムーブメントの中心キャラとして活躍することになるのだ。

XBOX360版はアーケード版に比べグラフィック性能が格段に上がっており、それを贅沢に使ったアイドルのダンス映像は非常に素晴らしいものであった。多くの人がそれらのダンス映像を録画し、その頃人気になり始めたニコニコ動画へとアップするようになった。そのムーブは徐々に大きくなっていく。やがて映像を編集し、流れる音楽を別のものに変え、「あたかも別の音楽に合わせてアイドル達が踊っているように見える動画」が投稿されるようになった。いわゆるMAD動画（※3）と呼ばれるものである。これがニコニコ動画内で一大ムーブメントを巻き起こし、連日ランキングの上位をアイマスMADで独占するという事態まで起こった。このアイマスMADにおいて、凄まじい登場回数を誇っていたのが何を隠そう天海春香なのである。

春香はその突出する特徴の無さ故に、あらゆる楽曲へ合わせることが可能であったのだ。普通アイドルが歌わないような退廃的な歌、攻撃的な歌、お笑いにしかないネタ歌、あからさまな表現がある歌等々。多くの歌が春香のダンスと合わさり、人気動画として称賛を浴びるようになっていった。これは、春香自身が非常にかわいいアイドルであり人気が高かったことも要因の一つではある。しかし何よりも、没個性が故に「何にでも合う」ことが最も大きな要因であるといえるだろう。2ch（※4）のアイマスMADスレッドに、このようなレスポンスが書かれた事がある。「アイドルたちを食べ物に例えると、春香は『ごはん』」。まさに、言いえて妙だ。春香の没個性さは、アイマスMADムーブにおいて強大な力となったのであった。

アイドルは直訳すると偶像、つまりは虚構の存在である。最も特徴がないと言われていた子は、その没個性さによってあらゆる曲の歌い手として「変身」していった。その姿はまるで、アイドルという概念をそのままキャラクターにしたかのようであった。「何にでもなれる」「何でも歌える」「どのような設定にも耐えられる」。アイマスMADムーブにおいて、天海春香は間違いなくトップアイドルであったのだ。

※1 アイドルマスター（アーケード）

正式名称は『THE IDOLM@STER』である。ナムコ（現バンダイナムコゲームス）が開発し、2005年7月26日に稼動を開始したアーケード用シミュレーションゲームである。

※2 アイドルマスター（XBOX360）

こちらも正式名称は『THE IDOLM@STER』である。バンダイナムコゲームスが開発し、2007年1月25日に発売したXbox 360用育成シミュレーションゲームである。アーケード版からの移植作品となるが、Xbox 360版ではシステムやグラフィックの変更と共に、新たにメインヒロインとして「星井美希」がプロデュース可能となっている。

※3 MAD動画

既存の音声・ゲーム・画像・動画・キャラクターなどを個人が編集・合成し、再構成したもの。単に「MAD」と呼ばれることが多い。英単語のmad（馬鹿げている）が語源。現在は様々なMAD動画がyoutubeやニコニコ動画にアップされている。

#### ※4 2ch

正式名称「2ちゃんねる」は、日本最大の電子掲示板サイトである。略して「にちゃん」「2ch」などとも表記される。ジャンル別でカテゴリ分け（「板」と呼ばれる）されており、その中に話題別で個々のスレッド（「スレ」と呼ばれる）が立てられる。

~~~~~

（↑オパーリンの感想）

日本においてアニメの勢いは凄まじいものがある、という言い方が既に「時代遅れ」なものに感じられるようになってしまったのは何時ごろからだろうか。僕が中学生の頃、格好では「暗い、地味な」印象のある同級生たちが、普段の物静かな印象とは打って変わって、熱狂した様子で「エロゲー」について熱く語り合っていたのは今でも覚えている。僕が中学生というと2000年代の初頭の出来事である。すっかり置いていかれてしまった。

「ゼロ年代」という言葉があるが、2000年代の初めに創作活動を始めた若手の表現者、創作者、の事を指して言う言葉である。彼らの活動と、現在の状況は決して無関係ではないというのは、僕だけの意見ではないだろう。

ライトノベルの売り上げは一般の書籍に対しても相当なものになっているし、数人でカラオケに行けば必ず誰かが「アニソン」を歌う。スマホの普及で、僕を含めた多くの人が2chのまとめサイトを見るようになってきていることも、何かしら関係しているだろう。現代人にとって、ネットが避けて通れないものになっていることと、アニメとネットの親和性、相性の良さ、この二つは今後の世の流れについて考える時に重要な、関連するキーワードになってくるだろうな。

つまり、何が言いたいかというと、もはやアニメは一部の「アニオタ」と呼ばれる人たちだけに関係のある事ではなくなっていて、日本の文化全体の流れを左右する存在になっているという事だ。だから、僕を含めアニオタではない人も、アニメ業界で何が起きているのか知る必要があるし、それが一般の社会（つまりは全体）とどう関わってくるのかについて考える必要が出てきているのではないかと思う。

次は、多良鼓氏の本文について。没個性の凡庸性、転用可能性という話としても理解できるのではないだろうか。また、メディアを跨ぐ時のポイント、という点においても興味深い内容だ。小説がドラマ、映画化されたり、漫画、アニメゲームが実写化、ラノベ化されたり、とストーリーがメディアを渡り歩く現象が活発化している。その時の利点としては、原作とは違った新たな客層を獲得できるという点である。彼の話で言うならば、音楽のアニメ化、キャラの普及、という二つの要素がある。

で、「没個性」について言えば、それだけで良いとは言えないが、より多くの新しい人達を原作の世界に導き入れる、という点から見れば、重要なポイントなのかもしれない。そして、それはアニメ、ゲームの話に限らず、一般的な事柄にも応用できる考え方だと思う。

多良鼓氏には今後も、僕にはない「視点」から文章を書き、呈示してもらいたいと思う。僕もそれを取り込み、自分の表現に役立てたい。また逆に、僕が書いたものも、多良鼓氏にとっての新しい「視点」になればいいなあ、とおもう。

ちなみに先日、多良鼓氏の自宅に遊びに行った際、別の友人に「月オパ」を紹介しようと思ったのだが、手元になかったのである。そこで僕が「こないだあげた「月オパ」の冊子ちょっと貸してよ」と頼んだところ、多良鼓氏は無表情で「ああ、あれ。読み終わったから捨てたわ」と発言したのである。ショックを受けた僕が「ヒドイ！」と抗議すると、ゴミ箱を漁りクッシャクシャになった「月オパ11月号」を持ってきてくれた。なんともクールな人なのである。

「12月4日（日）朝日新聞一面「カオスの深淵」について」執筆者 オパーリン

・「12月4日（日）朝日新聞一面「カオスの深淵」について」

執筆者 オパーリン

この日の朝日新聞は一面に「借金が民主主義を支配する」という記事を持ってきた。「民主主義」と言うよりも「資本主義の市場原理」が支配する、という様な内容だった。「朝日新聞、いよいよ本領発揮だな」という感じである。

大阪ダブル選挙、マスメディアは足並みをそろえて橋下前知事を「独裁」と言い、彼が勝った後も朝日では耕論欄に保守派の論客を使い、テレビでは「アンチ橋本特集」が組まれたり、橋本市長が私学助成金維持を訴える高校生を論破して泣かせる映像が流されたりしていた（細かい出所は覚えていない。個人的な「印象」と思ってほしい）。何故、メディアがこれほどまでに橋本を嫌うのか、僕には良く分からんが、戦時中やヒトラーの事を思い出して危機感を覚えているのかなあ、なんて思う。

国内に危機が訪れると独裁者が現れる、というのはよく言われることだけれども、同時多発デモ、欧州金融危機、国内では東日本大震災か、今や世界中が「ヤバイ」のは火を見るよりも明らかで、みんな「ヤバいなあ、でもどうすりゃいいんだ」と思っているんだと思う。学生の場合はこれに加えて「就活」なんていう自分に直結した危機も付け加わって、文字通り陰鬱な状態。そんな中での橋下圧勝、23歳の僕ですら「なんか聞いたことある気がするなあ、こんなシチュエーション」と既視感を覚えるくらいだから、メディアの人たちは尚更なのかもしれない。

今書いたような終末を連想せざるをえない状況の中、朝日新聞が「持ち味」を発揮しだしている、というのがこの文章の本題です。最近の新聞にざっと目を通した感じでは、11月23日の「政治時評2011」で共産党委員長の志位和夫氏が登場し、12月1日の「社説余滴」にて「民主主義のもろさ、危うさ」という記事が書かれている。で、今日（12月4日）の一面、の流れである。もう、これで「中立公平」というのはキツイし、右がっている人たちから見れば「これだから朝日は」と言われそうである。まあ、全部が全部左になったと言ってる訳じゃないんだけどさ。そういう意味では保守論客の起用でバランスを取ったんじゃないかな。

ここまでの流れをまとめる。世界は危機→どうしよう？→（日本）橋下登場→（マスメディア）橋下は独裁だから嫌、とここまで来た。で、この流れの後で、朝日新聞は「でも資本主義は限界、どうしよう」に逆戻りした。個人的には「やっぱ、社会主義が良くね？」って言うように聞こえるが、で、もし朝日新聞が「そんなこと言ってないじゃん」と言うならば、やっぱり「どうしよう」に逆戻りしている訳で、メディアとしての責任を全うしているのか疑問に思う。

と、くだら書いてきたが、僕は安易なメディア批判をしないわけじゃない。「じゃあ、どうしよう」について、僕なりに考えたいわけである。というわけで、ここからは今現在のところ僕が考えている「じゃあ、どうしよう」について書いていこうと思う。

まず、僕の立場を表明する。最近、うすうす僕は「俺はアナーキストなんじゃないかな」と思い始めている。簡単にいうと「今あるものを少しずつ良くしていこう」という保守派でもなく「みんな幸せ、共産主義」という左派でもなく、「ぶっこわして、チャラにして、一から創ろうぜ」派な訳である。ただ、これでは余りに乱暴なので、もうちょっと丁寧に説明していく。

まず、保守派について。保守的な考えを持つ人達は、長らく力を持って現在の社会を造ってきた、と僕は理解している。で、その結果がこの体たらくなのだから、何か変えなくちゃいけないのは自明の理だと思うのだが。志もなく「公務員は安定しているから」などと言って公務員や大企業に入りたがる若者なんかも、僕は保守派だと思っている。というわけで僕は保守派ではない。

次に左派について。左派の定義自体がややこしくて一口に話すのは難しいのだが、この文章では「分け合おう、共産主義、社会主義がいい」という典型的な左派について述べる。世界ではソ連対アメリカ、日本においては戦後暫くして学生運動とか連合赤軍事件とかが起こって、資本主義対社会主義的なイデオロギーの対立が起こったそう。で、結果としてソ連は崩壊して、左翼学生たちは機動隊にボコられて転向して、連合赤軍も警察に捕まって、資本主義勝利で終わったらしい。ただ、社会主義の基本的なコンセプトは「社会保障を厚くする」という社会福祉として受け継がれたんだって、ヨーロッパとかで。俗に言う「大きな政府」とか「高福祉高負担」ってやつだね。で、現在、ヨーロッパ崩壊。とてもじゃないが、僕はこんな負け戦に参戦する気にはなれん。「共産主義は人間の怠惰を計算に入れなかったから失敗

した」なんていう論を良く聞くけど、僕もそうだなって思う。結局性善説、性悪説の話に帰結するっていうのが根深いなあ、って思うけどさ。というわけで僕は左派でもない。

ここまでの話は「そんなの知ってるわ」って言われそうな話ばっかだったけど、ここを話さないことには次に進めないから勘弁。で、ここまでの流れで「どっちもダメじゃん、じゃあどうするん？」ってなって、今みんな考え、悩み、色々言ってる。なかなか「第三のイデオロギー」は生まれず、「もうイデオロギーの時代は終わった」っていう人もいる。

ここからやっとなら僕の見解に入る。みんな困っている、行き詰まっている、みんなあれこれ考える、バラバラな事を言い出す。これだな、「バラバラ」、つまりは「多様性」。みんなが「同じ幸せ」を求める時代は終わり、それぞれが勝手に「オレ流幸せ」を求める時代に突入している。まあ、これも僕のオリジナルではなく、すでにいろんな人が言っていることなんだけど。で、様々な「オレ流幸せ」を求める社会においては「あれダメ、これダメ」の社会的な規制はその妨げになると思う。だから、最低限のルールを決めて「後は勝手にやれ」という流れになった方がいいと思う。つまりは「小さな政府」だな。

でも、でもそれだけだと「貧富の格差」が広がるという批判もあるし、事実そうだな。じゃあ、通貨もやめよう。あれ、なんにも考えないで書いてきたけど、行き詰まったぞ。通貨なくなると全てのサービスが停止して、原始社会に逆戻りしちゃうからな、自給自足、原始回帰になっちゃうな。まあ、仕方がないか。行ける所までやってみよう。

はい、原始社会に戻り、無政府状態になりました。で、次はどうなるかということ、一からやり直し、しかないな。歴史は繰り返すのか。でも、これも一つの案だな。ただ、現実的にはこうはならないよな、たぶん。

じゃあ次は、今ある状態をどうやって維持していくか、という方向で考えていくか。まず、地球レベルで言うと人口が多過ぎるから、減らさなきゃならない。しかも、産児制限して自然減を待っている余裕はなさそうだし、高齢化も解決できそうにないから、誰かが計画的に「間引き」する事をしなきゃ無理だと思うんだよね。その（誰か）が人間であってしまくと、批判がハンパないから、虐殺はきっと無理だな。いつか「密度効果」で大量死するのをまっているしかないのか。それとも、世界規模で自然災害が起きて減るのか。こういう事言うと「人間失格」とかかって人格否定されて社会的に抹殺されるんだろうけど、他に思いつかないしなあ。悩ましい。

まとめると、如何に人口減らすか、「虐殺（戦争、世界規模での老人狩りなど）」、「自然災害待ち（地震、疫病など）」の二択しか無いんだよねこのまま何もしないと。まあ、その頻度と量に幅はあるけど。チョビチョビだけど頻繁に減るか、ガツンと一気に減るか。で、後者は絶滅の危険があるし、誰も望まないでしょう。でも、虐殺も自然災害もコントロールしにくいから、運任せ的な要素は強くなるよね。

書いてて思ったが、「原始回帰論」においても「人口問題」は回避できないんだな。でも、原始回帰すると国家が無くなって、小さな集団の集まりになるだろうから、それら同士で「紛争」すれば、「チョビチョビ頻繁型」の人口調整になると思うな。

まとめ。話は「人口問題」に移り、「如何に大量死を防ぐか」という論点になった。核戦争は人類全滅の危険があるから、やっぱりなんとしても核放棄はやらなきゃな。それができないと常に全滅のリスクを抱え続けることになる。でもな、無理ゲー臭がプンプンするなあ。

詰んだな。ここから得られる現段階までの結論「理詰めでの完全解決は無理」。じゃあどうなるか、ということ核に関しては口約束で「核は使わないよ」とパワーバランスで危うい橋を渡り続けるしかない。その上で人口調整、きついなあ。

あと、言い忘れてたけどよく「イノベーション（技術革新）」が解決策として期待されているけど、これもコントロールできないからなあ。「科学教を信じる」という楽観主義だな。あ、また論点変わったなあ。

「何とかなるさ」を「信じる」楽観か、「どうしょうもないけど、どうしよう」と「悩む」悲観か、どちらを選択するかの問題にもなってくるなあ。「困難だけど頑張ります」というのはマジックワードだし、前者っぽい。

考えつかれたわ。結論は「何を選ぶか」ってことだと思う。で、キツいながらも選択肢は色々あるから、「みんなでこれ選びましょう、反対意見の人も我慢しなさい」じゃなくて、「それぞれが自由に選んで意見が合うもの同士でそれを実行していく」がいいと思うな、俺は。なんか最初の方に戻っちゃったけど。地域分権というか、自己選択型小集団統治だな。

以上。「こうすれば解決するよ」というのを知っている人がいたら僕に教えてください。そして、野田総理に教えてあげてください。

「「ノイジーマイノリティー」から「対話」まで」執筆者 オパーリン

・「「ノイジーマイノリティー」から「対話」まで」

執筆者 オパーリン

読んでくれている人へ、始めに言っておこう。この文章は何の結論にも至らないだろう。その上、考えながら書くので、グッチャグッチャと要領を得ない分かりづらい文章になってしまうだろう。それでもなお、書くことが必要であり、読まれることが必要な問題だと判断したので、こうして書き始める。

まずは用語の説明だな。今の時代ネットで調べりゃ一発、僕の説明よりも断然立派な解説が読めるから、いちいち僕が説明する必要もないのかもしれないけれどね。まあ、一応、僕なりの認識を紹介するという意味においても書いておこうと思う。

「ノイジーマイノリティー」とは、読んで字のごとく「うるさい少数派」、まあ僕みたいな奴のことを言うのかもしれない。人権などを振りかざして、過剰に主張する輩の事を言う。ただ、「ノイジーマイノリティー」に該当するかどうかの明確な基準はなく、実際微妙なところである。

民主主義の社会において、表向きは多数決で物事が決まる。すると、どうしても少数派の意見は反映されにくくなるから、少数派の人たちが声を上げて、不当な差別の撤廃等を訴えることは重要である。容疑者の人権の確保なんかも、無くなったら大変な問題だしね。マイノリティーの声を無視、ならまだしも弾圧するようになってしまっはまずい。最近の話で言えば、オリンパスか、腐敗したマジョリティーに立ち向かう社長。

しかし一方で、何でもかんでも騒げばその意見が通るんでは困ってしまう。企業を悩ませるクレーマーとか、近所迷惑な「騒音オバサン」などは誰しもが問題だと認めるところだろう。

上記のように、誰が見ても片一方が明らかにおかしい時はこの問題への対処は別に難しくない。問題になるのはその判断が人によって割れる時である。そして、社会的な問題になるのは、大体が何とも判断しがたい事案である。

例えば、「女性専用車両」。あれは男性差別にはならないのだろうか。「痴漢冤罪」も訴えられた男性は無実証明が非常に困難であることから重大な社会問題になっている。もう少し詳しく書こう。流れとしては「女性＝弱者」という考えのもと、その権利を守り、男女平等にするために女権団体が声を上げてきた。それ自体は必要なことである。しかし、保護され過ぎると、今度はその権利が利権になってしまう危険があるのだ。で、難儀なことに、権利の主張がいき過ぎているかどうかの判断が非常に困難なのだ。そしてだんだん、下手な事を言うと訴えられるから、誰しもがその問題について口をつぐむ様になる。議論自体が無くなってしまふのである。

「女権運動」「同和利権問題」「新興宗教関係」「障害者問題」、ざっと思いついた限りでこころ辺の話題はヤバイのでメディアを含めて殆ど誰も何も言わなくなっている様に思える。

「嫌煙運動」「貧困（主に生活保護）、格差問題」「ホモ、レズ系問題」「暴力団問題」「年金（世代間格差）問題」こころ辺は、今ホットな感じだが、さっきのフェミやらとは逆に、マイノリティー側が不利な状況にあると言えよう。で、僕はこれらにこそ、今考える必要がある問題だと思う。ただ、それぞれに経緯があり、一緒くたにまとめると乱暴になってしまうので、一個一個考えていく。と言いたいところだが、それぞれに本が何冊も書けるレベルの問題なので、とてもじゃないが書ききれない。仕方がないが、まず、総論的なことを書こうと思う。

社会が上向きな時はまだ余裕があるので、社会はマイノリティーに対して寛容な態度をとる傾向が強く、それほど深刻な問題に発展しない事が多い（うやむやなままで放っておかれる、とも言える）。しかし、現在の日本（に限った話ではないが）の様に、社会の余力が無くなってくると、マイノリティーを弾圧する傾向が強まったり、双方が過激化しやすくなる。喫煙者は差別され、生活保護を筆頭とした貧困者は「自己責任」と非難される。一方で国や既得権益陣営は保身に走る。

マイノリティー、マジョリティー、は数だけの問題ではなく、集団が持つ「力」も含めた問題である。そう考えると、公務員、東電、ＴＴＰ、橋下、沖縄、今騒がれているあらゆる問題の背景にこの「力」の問題が潜んでいる。

明確な正解が見あたらないこれらの難題、どうすればいいのか、何がいけないのか。ここから、僕の意見を書く。

まず、対話が不足している、あるいは存在していない、そして封殺される傾向にあることが問題だ。そのために、僕らは自分たちの社会の事を「自分で決めている感覚」を持つことができない。その結果、「どうでもいい」「自分だけは何とかならないものか」と投げやり、愚民化する。健全な言論はますますなくなる。負のスパイラルだ。

次に、何の決定もななれず、ズルズルと時間だけが過ぎてしまっていること。これは「対話の不在」によるものだが、

良かれ悪かれ決定し実行すること無しには状況は悪くなるばかりなのだ。

上記二点をふまえて、具体的な行動指針を書く。

まず、「社会の事」を「自分の事」として考える。この際、現時点では「社会」は「日本」でも「世界」でも構わない。ただし、「家族」や「自分の会社」などはダメ。

その様にして考えた「自分の意見」を他者に表明する。手段は「口頭」、「ブログ」、何でもいい。

他人と「社会の事」について議論する。この際、できる限り感情を排除し、論理的になるように心がける。相手が誰であろうと遠慮はしない。「声の大きさ」が勝敗を決定してはいけない。相手の話を真剣に検討する。

社会的な運動に積極的に参加する。この運動の規模は問わない。「町内会」でも「フジデモ」でも「選挙」いい。ただし、あくまでも排他的にならず、対話の為の「運動」になるように心掛ける。「投票による参政」は必須。

今思いつくのはこれくらいだ。投げやりになって諦めたら、全員終わる。一人一人が変わるしかない、「微分」の論理であり「ボトムアップ」の考えである。

上記を完遂した上で、現行の社会システムに限界があるのならば、根本的に作り直すことも必要なのかもしれないと僕は考えている。

今述べた「根本姿勢」の下、ここ数年僕は発信し続けている。が、いつも「暖簾に腕押し」感がついてまわる。でも、これからも僕は訴え続けるだろう。オナヌー上等である。「生きること」は「対話する事」だと信じているからである。

何度でも言おう、「対話」し「関係」する事なしに、人は生きてはいえない。さあ、話し合おう。

「日本海がみたい。一再挑戦編一」執筆者 オパーリン

このコーナーでは「エッセイ」では載せきれない様な長さの文章をぶつ切りにして連載していく予定です

・「日本海が見たい。一再挑戦編一」

執筆者 オパーリン

2011年11月12日(土)、深夜。効きすぎた暖房のせいで寝汗をかきながら、俺は再び思いついてしまった。「今度こそ、日本海を見よう」と。私はなぜ失敗から学ぶということができないのか、つまりは懲りるということをしないのか。そう自分でもいささかうんざりとしながらも、そんな自分の思いをあざ笑うかの様に、俺の身体は血湧き肉踊り始めていた。ムズムズと、じっとはしてられないのである。幸い今日は土曜日、奨学金も入ったばかりで、最悪の場合一泊してくればいいさ。気づけば防寒具を着込み、もう走り出していた。

で、ここからの道程は前回とほぼ同じなので省こう。同じように寒く、同じようにケツが痛かった。昼過ぎには前回の折り返し地点である松井田町横川の「おぎのや」に着いていた。せっかくだから(今回は金もあるので)、釜飯を食らってやった。美味美味、やはり旅はうまいものを食ってなんぼってところがある。

午後も懲りずに北進し、上田、長野市を過ぎて、豊野町というところまでたどり着いた。目標としていた黒姫温泉まであと少し、日本海まで70キロ強という地点である。が、どうにもこうにも、身体が限界を迎えていた。もう1キロだって走れないという程になっていた。体温が低下しすぎて震えが止まらないのである。

とりあえず、近場にあった温浴施設「豊野温泉 りんごの湯」を利用することにした。極楽とはまさにこの事、芯から温まり、喫煙所にてこの日の宿を物色した。その結果、黒姫温泉はもはや1室も空いていないことがわかり、10キロ程戻って長野市のビジネスホテル「ホテル日興」に泊まることにした。実際このホテルを探すのも大変で、4、5件電話してやっととれたのである。

「ホテル日興」、とんでもないボロホテルであった、あれで4500円とは高すぎだろ。とグチっていても仕方がない、泊まれただけでも良しとしなければな。と思い直し、せっかくなので夕飯がてら長野駅周辺をぶらつくことにした(ホテルは駅周辺の繁華街の外れにあった)。

長野駅周辺を徘徊する。歩いてみると分かるのだが、駅周辺には風俗店はおろか、キャバクラすら一軒もない。長野県は教育県だから性風俗店は禁止されている、というのは事前に知っていたのだが、ただただ居酒屋だけが続く繁華街の光景というのは何だか異様である。まあ、つくば駅前も対して変わらんが、長野は繁華街の規模がもっと大きいのである、池袋くらいの規模はあるのに、キャバちゃん一軒ないのである。ふう。

そのせいかは知らんが、街を歩き回っているアベックの比率が異様に高い様な気がした。女とつき合えない男は遊べない、街を歩く権利すらない、というのはちょっと言い過ぎかもしれないけれどさ。排除排除で清潔にしていくと、スタンダードからあぶれた人達の居る場所が無くなっていくというのはあると思う。

まあ、初めから女遊びをするほどの金は持ち合わせていなかったのも、がっかりすることもなく、信州味噌ラーメンを食らい、駅前にあった台湾式マッサージを利用し(運転による肩こりがハンパなかった。施術はおばちゃんだった)、ホテルに戻った。

ホテルのテレビでアダルトチャンネルをつけたところ映ったので「お、金払わなくても観れんじゃん」と小躍りしたものの、1分程で画面が黒くなり「カードを購入してください」との表示が出たので、諦めて明日の予定を立てることにした。

その結果、日本海を見ようとすると明日には帰れない(研究室の植物の水やりに間に合わない)事が判明した。長野から日本海の見れる上越までは往復150キロ以上あり、5時間はかかってしまう。またもや無計画が仇と出たのである。

2011年11月13日午前6時過、「ホテル日興」を出て、一路つくばを目指し走り出す。再挑戦での日本海断念は痛手ではあったが「まあ仕方がない、宇都宮で餃子でも食って帰るか」と気を取り直しての出発であった。しかし、走り出して1時間もしないうちに寒さで痙攣がはじまってしまった。軽井沢手前の東御市のコンビニでホッカイロを購入、装着する。

実は、前回、今回の旅を通してホッカイロを購入したのはこれが始めてである。「男らしく寒さに耐えたかった」とか

そういう根性論的な要素はっさい無く、ただ単に思いつかなかったのである。バカ極まりない。北極で全裸で震えている人と同じである。寒かったら暖めればいい、どうしてそんな簡単な事に思いが至らなかったのだろうか。と後悔しても何にもならないのではあるが。

ホッカイロをした途端、今までの寒さが嘘のように消えて無くなり、快調に飛ばし、軽井沢を越えて安中市に入る。そろそろガソリンが無くなってきたので、目についたスタンドに入り、財布を取り出そうと鞆をまさぐる。

鞆をまさぐる。が、見あたらない。財布が、ないのである。一瞬のうちに血の気が引いたのが分かった。次の瞬間、必死で記憶をたどり、財布を落としたであろう地点を探す。ホッカイロを貼り付けたコンビニのトイレ、あそこしかない。きびすを返し、コンビニを目指す。

コンビニに到着（ガソリンは何とかもった）。店員さんに財布の落とし物は無いか、と訪ねる。「無い。」と店員答える。急いでトイレを調べるが、財布は見あたらず。

終わった。自分を見ず知らずの土地で、自分が何者であることを証明する術を失った。その上無一文。何とも心細いものだ。

落ち込みながらも、店員に近場の交番の場所を聞き、交番に向かう。交番にて、遺失物届を提出する。が、そんなものを出したところで、現状に対しては何の解決にもなっとらん。警察官に

「金を貸してくれ」

と頼むが、断られる。

「市役所で電車の切符をくれるからそっちに行け」

と言われる。

東御市役所にて。受付（当直）のおじいさん（恩人①）に事情を話すと同情してくれ、柿の種、クッキー、缶コーヒーをくれた。ただただありがたい。銀行のカードを止める（携帯は持ってた）。切符を貰うための書類に記入し、切符を貰う。が、その切符は上田駅までしか行けない切符なので、その先をどうするか考えにゃならん。

友人（恩人②）に電話し

「今から上田駅まで俺の分の旅費をもって迎えにきてくれ」

と、自分で言いながらも無茶だとしか思えない要求をする。が、友人はただ一言、

「分かった」

と即答した。濡れた。濡れた。もう一度言おう、濡れたよ。ああ、女に生まれたかった。彼に抱かれたかった。でも、俺は男だし、じゃあ、掘られてもいいや。というか掘ってくれ。心からそう思った。が、友人にはそっちの趣味は無いので、どうにも俺は彼に恩義を感じる以外の何もできん。金はもちろん返すけど、そういう問題じゃなくてさ、分かるだろ？

そうこうしている間に、東御市役所のおじいちゃんが知り合いのガソスタの店長（恩人③）に頼んで、バイクを預かってくれる話を付けてくれた。言い尽くせぬ感謝の気持ちを「ありがとうございました」に込めて、ガソリンスタンドに向かう。

ガソリンスタンドにて。ガソリンスタンドの店長はちょっとブスっとした感じの人に見えたが、一週間後に取りに来る旨を伝え、財布喪失の事情を話すと

「おう、俺も若い頃はよく旅したもんだよ。若いうちは無茶するくらいがちょうどいいんだよ」

と同情してくれた。実際は信州訛り（？）で何を言っているのかあまり分からなかったが、多分そういうことを言っていたのだと思う。いろんな人に迷惑をかけっぱなしで滅入っていた僕には、その優しさがありがたいらなかった。

ガソスタ店長に礼を言い、信濃鉄道田中駅に向かう。30分に一本くらいしか電車が出ていないようだったが、運良く10分程で電車に乗ることができた。電車の中で、友人から

「東京着いたから、上田駅のバス会社の人に金は後払いできないか聞いてみる」

とのメールがくる。つまり、東京で会えないか、というのである。警察の一件から、僕は

「金借りるのは無理だろ」

と思ったが、恩人の提案に口をはさめる様な立場にないのは重々承知していたので

「分かった」
と返信した。

上田駅。どうやらバスの切符は観光案内所で帰るらしいので、受付に向かい係りのおばさん（恩人④）に話しかける。
で、おばさんに事情を話し、料金後払いができないかとお願いする。すると、おばさんは
「あら、大変じゃない。私が貸してあげるわ。」
と言ってバス代を貸してくれた。様々な人の好意に助けられ、ついには見ず知らずの人間にバス代を貸してくれる人までいた、僕はほとんど泣きそうになっていた。今までの傲慢な罰当たり極まりなかった自分の人生を悔いた。改心しよう、そう心から誓った。
「必ず返しにきます。」
そう言って僕はバス停に向かった。

千曲バス、上田駅一池袋駅。沢山の人に助けられ、僕は何とかバスに乗ることができた。「真人間になろう、ありがとう長野。」と感傷に浸りながら窓の外の風景をぼんやりと眺めていた。と、隣の席に人が座った。チラリと見やると若い女の子である。なかなか可愛い。しかし、全てがすばらしい的な悟りモードに入っていた僕は、イヤらしい気持ちになることなんて微塵もなかった。そう、なかった。

バスが出発し、乗客である農家のおばちゃんみたいな人たちは途端にくっちゃべり、銘々にいなり寿司などを取り出し、食べ始めた。車内にいなりのニオイが充満する。隣の女の子は化粧を始めた。普段の俺ならば、「ふざけんな、ニオイの出るもの食ってんじゃねえよババア、っていうか静かにしろよ、こっちは疲れてんだよ。あと、隣のクソアマはなんで公共の車で化粧してんだ？常識なさ過ぎだろ。」ぐらいの悪態は平気で頭の中に向け巡っていたはずであるが、今の俺は違う、なにせ真人間だからな。全然平気。愛すべき全てのものたち。

と、隣の女の子が化粧を終え、僕に話しかけてきた。
「すいません、なんか化粧しちゃって（テヘツ）。」

仏な僕は、

「あ、全然平気ですよ。」

と言って女の子の顔を確認した。

ズキュッ！！電撃が走った。可愛い、あまりにも可愛い。佐々木希ちゃんに勝るとも劣らない程の可愛さである。こうして俺の仏モードは終わった。獣モード発動である。

幸い、渋滞によりバスが大幅に遅れてくれたので、天使と仲良くなる時間は十分にあった。僕は天使とのおしゃべりを楽しみ、その間ずっと、クンカクンカとエエ匂いを嗅ぎまくっていた。イヤらしい気持ちで一杯だった。乗車中、助けてくれた人の事なんて一度も思い出さなかった。そう、俺は根っからの下衆野郎なんだ。池袋駅で待っている友人の事なんて、すっかり忘れてしまっていたんだ。

バスの中で仲良くなった天使はカナちゃんという名前で、大学生、福祉を勉強しているらしい。今日はお兄ちゃんに会いに行くらしい。カナという名前は少しいただけなかったが、それ以外は天使は完璧であった。おっとりめのギャル、俺は瞬時に恋に落ちていた。

が、旅というのは、人の出会いというものは、一期一会、またそれがいいのである。池袋に到着した。楽しい一時を過ごさせてくれた天使に潔く別れを告げた。というのは嘘。下心満々の俺はアドレスを聞こうとしたが、ニッコリ断られた。所詮はヴィッチ、クソが。ヴィッチはお兄さんに会うや俺の方を一度も振り返る事なく、雑踏の中に消えていった。俺はまた一つ傷つき、また一つ大人になった。

ヴィッチにふられた俺は、即座に我に返り、真人間に戻った（ヴィッチにふられた心の傷に気づかないふりをするためである）。友人に

「ありがとう、今着いたよ。このご恩は一生忘れません。バスの中でも早く君に会いたい一心だったよ。」

と電話し、待ち合わせ場所の東口に向かった。

（「日本海が見たい。一事後処理編一」（最終回）につづく）

「日本海がみたい。－再挑戦編－ （写真）」



↑ 高崎 小林山達磨寺にて。『水曜どうでしょう』で大泉洋も訪れたお寺。



↑ 同じく達磨寺にて。非常に気持ち悪い達磨だったので撮った。何か宿っていそうで怖いよね。



↑ 松井田町 横川にある釜めし屋「おぎのや」にて。「おぎのや」は前回の折り返し地点でもあった。今回はいくらか金をもっていたので釜めしをくらってやった。味は、釜めしの味がしたな。



↑ 松井田町 横川付近 国道18号線。高崎を越えてから軽井沢あたりまではずっと、こういう風景が続く。もと
もと、こういう風景が好きだし、今回はミュージックプレイヤーを持っていったから、尚のこと退屈はしなかった。

本

このコーナーでは僕がその月に読んだ本や、見た映画等の簡単な感想を書いていきます。

本

・高田純次

『適当論』

2時間とかからずにサクッと読めてしまった。以前彼の『適当教典』という本を読んだことがあったのだが、内容は殆どそれと変わらず。ただ、和田秀樹氏との対談や精神分析があって、それは面白かった。

また、高田純次氏本人について言えば、あの適当さは天性のものがあり、素人が真似して出来るような代物ではないと思う。また、彼に憧れる人間の大半は「俺もあんな風に何も考えずに、楽に生きたいなあ」という風な才焦がれ方をしている様に思える。そこには、ある種の「侮蔑」が含まれていて、彼に憧れる事で「俺はこんなに真面目に頑張っている」と、自分を慰め、正当化している一面があるのだと思う。

しかし、そういう人たちの認識は間違っている。彼の適当を体現することは決して「楽」ではないはずである。あのレベルの適当を体得する為に、彼はかなりの代償を支払っているはずであり、そしてそれをおくびにも出さない点において、彼の適当は一流なのだと思う。僕は彼のそういったこだわりが好きなのである。

・近藤康太郎

『朝日新聞記者が書いた「アメリカ人が知らないアメリカ」』

作者は典型的なアングラ好き人間であった。そういう人が朝日新聞の記者として働いているという点が興味深かった。内容も、「お利口ではない人間の視点」から見たアメリカについて書かれていて、得るものは大きかった。彼の様な「アウトサイダーとの境界線ギリギリにいるインサイダー」みたいな人がいる組織というのは豊かだし、どの組織にも彼みたいな人が少しはしないと駄目なんだろうと思う。

・桐野夏生

『メタボラ』

桐野夏生の長編はハズレだったためしがないが、これも例外に漏れず。桐野夏生の安定感は半端ない。気付いたら記憶喪失になっていて、一円も持っていない男が貧困にあえぐ話。工場労働の描写の緻密さ、具体性は比類なき領域に達している。相当綿密な取材に基づいて書かれているんだろうと思う。

いろんなテーマが交り合って、グチャーってなって、クライマックスに向けて練り上げられていくあの感じ、長編小説の醍醐味だが、それをあのレベルでこなせる現役の日本人作家は、ちょっと他に見当たらない。冷淡な感じの地の文も好き。

・桐野夏生

『アンボス・ムンドス』

人間の闇、なんて言っちゃうと簡単なんだろうが、読んで吐き気がするレベルの黒さ。相当濃ゆい短編集だった。中でも『植林』が個人的には良かった。不細工な男の自己実現はよく小説のテーマになるけれど、ブスな女の心の歪みはあんまりテーマにならない。殆ど解決のしようがないからである。で、桐野夏生はその「どうしようもなさ」を小説にしている。なので後味悪い事この上ない。そしてその分、ぬぐい去れない「男女格差」というテーマがあぶり出される。こないだ、朝日新聞の対談ページで上野千鶴子が出てたけど、（若い）女性の貧困という問題はマジで深刻な問題。で、この問題が特に厄介なのは、桐野夏生の小説に書かれているみたいに、そこに「ブスかどうか」という非常に定量化しづらい要因が少なからず絡んでいる所にもあると思う。ここで取り上げるには大きすぎる問題なので、近いうちに僕もちゃんと考えて、まとまったものを書かないとだな。

・松沢呉一

『エロ街道を行く』

性風俗にどっぷりと漬かった人間の性風俗論考。市井の性風俗学者というのがぴったりの内容であった。やっぱりね、本読んだだけで云々言っても始まらない、という所があると思う、このジャンルは。セックスワーカー問題、取り扱いの難しい問題だよね。事実、殆ど詐欺まがいの搾取をされている女性はたくさんいるんだろうし、それは放置すべきじゃないだろうしね。

この問題も、継続的なテーマとして今後も色々書いていかなきゃな。

・北杜夫

『マンボウ最後の大バクチ』

最近北杜夫先生の追悼記事がよく新聞にのっていて嬉しい。年甲斐もなくバクチに熱狂する爺さんのエッセイ。可愛らしくて、読んでて何度も噴き出す。

・伊藤計劃

『虐殺器官』

彼の持つ膨大な知識がその卓越した先見の視点で選別され、「世界」を読み解き「未来」を変えるために彼の全精力が注ぎ込まれている。その事が読んでいてビシビシと伝わってくる。あくまで現実世界と向き合う為に書かれたSF、今まであまりSFを読んだことが無かったけれども、これはすごい。

『虐殺器官』は彼の処女長編で、9・11以降の世界を予見している。さらにその先の世界について書かれた二作目『ハーモニー』と合わせて読む事をお勧めする。小説に限らず、創作物にはその作品の「濃度」があると思うんだが、伊藤計劃の作品はその濃度が非常に濃い。読んでいて、彼のエネルギーがドッと流れ込んできて、読み終わるとぐったりと疲れる。それが読書の醍醐味だと思うんだけどね。

・石川英輔

『雑学「大江戸庶民事情」』

ロマンチック、というのは適切ではないかもしれないけれど、江戸時代の庶民の生活を詳解したこの本を読んで、そう思った。大きな意味での個人としての生き方論としても読むことができる。その意味において、江戸の生き方はなんか素敵だなと思ったのだ。

また、雑学書として読んでも非常に面白い。例えば江戸には水道が張り巡らされていて、当時の世界の中では非常に先進的かつ衛生的な社会だったんだって。

・正高信男

『天才はなぜ生まれるか』

天才はどうやってできるのかって言うと、ある一面において能力の欠陥（発達障害）があったからこそ、それを補うために他の能力が引き出されたんだよ、的な主張。エジソン、アインシュタイン、レオナルド・ダ・ヴィンチ、アンデルセン、ベル、ディズニーの6人が紹介されている。この6人、それぞれに別の障害（と思われる傾向）を持っていたらしく、それぞれの天才性と障害の因果関係について考察されている。

「あ、俺はこの人に似ているかも」と、自分の行動と照らし合わせて読むと面白いし、なんだか自信が出てくる。ちなみに僕はディズニーと似ていると思われた。症状としては「ADHD（多動性障害）」だそうだ。その特徴を引用してみよう。

- ① 手足をせわしなく動かしたり、座しているときにも、もじもじする。
- ② 教室内で席を離れたり、座っていなくてはならない状況下で席を立つ。
- ③ 不適切な状況で走り回ったり、よじ上ったりする
- ④ 休みの時間を、静かに遊んで過ごすことができない。
- ⑤ たえず活動しており、まるで「動力に駆られる」ようにふるまう。
- ⑥ 過度に話す。
- ⑦ 質問が終わるまえに、だしぬけにしゃべる。
- ⑧ 順番を待つことができない。
- ⑨ 他人のじゃまをする。

思い当たる節がありすぎて笑える。小学生の頃もこれらの理由で怒られてばかりいた。

で、「あー、俺は天才だったんだ」と解釈し嬉しくなってしまった。しかし、その後ウィキで「ADHD」を調べたところ、僕みたいに（天才だと思いたくて）「俺はADHDだぜ」と公言する「自称ADHD」が多くて問題になっているらしい。「みんな考えることは同じなんだな」と思ったのであった。

映画

- 映画 -

・『ブンミおじさんの森』

観念映画。個人的には筋のある話しの方が性に合っているみたい。自然、霊、都会、そこら辺がキーワードなのかな。タイの映画。冒頭にラオスからの移民の話が出てきて、タイ人の感覚というのを知らない僕としては、そこら辺は面白くて良かった。

あと、タイの話で言うと、タイではまだ「不敬罪」があるらしくって、今論争になっているというのを新聞で読んだ。もっと色々、そういう東南アジア事情を勉強してから観ればもっと面白かったのかもしれない。あ、洪水とかもあったね。

・『マチューテ』

コテコテのB級アクション映画、なのだろうか。僕はアクション映画は詳しくは知らないのでよく分からんのだが、そう思えた。狙っている笑いの質、センスはまさに「しょーもない」もので、そのしょーもなさの洗練具合としては秀逸だった。チープな感じがね、良かった。

話の舞台はテキサス。テキサス州にはメキシコとの国境があって、映画の中でも、ギャグに混じってシュールな移民の問題が取り上げられていた。

で、これまた新聞記事でも最近メキシコ移民の問題が特集されてて、「うお、色々繋がるもんだな」と嬉しくなったのである。アメリカ人の中には「メキシコ移民がアメリカ人の雇用を搾取している」という様に考え主張する、ある種の純潔主義的な人達がいる、その人たちが国境に壁を作らせているらしい。詳しく知らないんでなんとも言えないんだが、アメリカに限らず、国とかそういうものをアイデンティティーの拠り所にする様な考え方って、どうも好きになれないんだよなあ。だって、国とか血統とかって、自分で決められないものじゃない。自分が生まれた後に、自分の行いによって築き上げたものを自分の個性として「誇り」にする方が、僕は好きだな。

・『しゃべれども、しゃべれども』

テレビをつけっ放しで寝ていて、うるさくって起きたら「映画天国」でやっていた。ありきたりな「傷ついた人たちの再生物語」と言ってしまうえばその通りなのだが、主人公が若い落語家という設定が良かった。立川談四樓の『石油ポンプの女』を思い出した。やっぱり売れない落語家という設定は物語になるのである。

で、この映画、見ていて「何か小説っぽい間というか行間だな」と思っていたら、やっぱり原作は小説。佐藤多佳子って人の小説だってさ。読んだことないけど、今度読も。

・『ホームレス J A P A N 無制限生中出し 路上生活者軍団 V S 大沢佑香』

タイトル通りの内容であった。この手の「ホームレス、日雇労働者もの」は殆ど全て、バクシーシ山下監督の『ボディコン労働者階級』の影響を受けていると言って過言ではないだろうと思う。で、肝心の原典『ボディコン労働者階級』（山谷の日雇労働者とからむ A V）は現在入手することほとんど不可能になっており、見れていない。非常にみたい。早くその文化的価値が評価されて、再版されないかなあ、と思っている。社会派 A V というのは非常に重要な表現手段の一つだと思うのである。

で、この作品の感想としては大沢佑香時代の作品（後に晶エリーと改名）なので、若くて身体が綺麗、とくにお尻のラインがプリッと上がっているのがもはや芸術の域に達しており、素晴らしかった。また、佑香ちゃんが汚らしい事この上ないおっさんたち相手にも関わらず、非常に優しく、愛を持ってからんでいる様に感動した。まさに聖母というにふさわしく、おっさんたちも佑香ちゃんに包まれて、まるで赤子のような穏やかな表情になっていたのが印象的であった。

A V の倫理的問題はごもっともなのだが、彼女の様な積極的セックスワーカー（プロフェッショナルとして、創造的な仕事をしている人間）の存在さえも否定するのは、やはりどこかおかしいんじゃないかと感じる。彼女によってどれだけの男たちが救われている事か。

・『A V 女優 小向美奈子』

前述の大沢佑香ちゃんとは好対照をなす作品であろう。A V の負の部分が見事に表れ出ている。小向美奈子の眼がイチャっている。焦点が定まっていないし、もはや人格が崩壊しているのではないかとすら思えた。

作品の作りも雑だし、小向美奈子にやる気が無い。フェラの時に全然吸っていない、口を広げて、激しく頭動かしているだけっていうのがバレバレ。見る人が見れば一発で分かる。モザイクかかるからってバレないとでも思っているのだろうか、笑止千万である。

それにしても、見ていて痛ましく、悲惨である。なんでこんなになってまで A V 出なきゃならんのだろうか、と悲しくなってくる。まあ、金なんだろうが、出る側も見る側も得をしない、悲劇だな。こういうのを見ちゃうと、A V の明るい話ばかりもしてられないな、と思っちゃうのである。

ただ、社会の底辺というか端っこの方には、その社会が抱えている問題が凝縮されて表れる、という点においてはこの作品は色々と分かりやすく出ていると思う。発売しちゃったものはもう戻らないんだから、みんながこういう A V をちゃんと見て、話し合っていくという風に、前向きにやっていかないといかないな、と思いつつ、ティッシュをごみ箱に投げ入れたのであった。

執筆者略歴

この雑誌の発行人である僕（オパーリン）以外の執筆者が記事を投稿してくれることになったので、このコーナーを設けた。

・オパーリン

１９８８年生（２３歳）。大学二年生の時、女にフられてばかりの学生生活に嫌気がさし、自分に都合のいいことしか起きない国を作りたいと思う様になり「王国構想」を計画し、勝手に「オパーリン王国」を創り独立。本誌『月刊オパーリン王国』も「王国構想」の一環である。

また、アマチュア小説家としても活動しており、過去３度「筑波学生文芸賞」に作品を投稿するも全て落選。「世の中が俺に追い付いていない」と負け惜しむ日々を送っている。過去の作品は電子書籍サイト「パブー」で電子化されており、無料で読むことが出来る。

・東町健太

たぶん１９８７年生まれ（２４歳）。僕（以降、オパ）が４月生まれであるのに対して、彼は３月生まれなので学年は２つ上である。オパが記事に添えてプロフィールを書いてくれと頼んだところ「お前が適当に書いといてくれ」と断られたので、オパが知りうる限りの事を書いていきます。

大学（文学部？）を中退後、ブラックな印刷会社で働くなど、身体を張った「文学」を行っている。オパとはかれこれ３、４年の付き合いになるだろうか。オパに文学と風俗のイロハを教える。オパが東京に帰省する度に会い、一緒に東京の町を散策する。現在は週刊漫画を印刷している工場で単調かつ過酷な労働を強いられている。本人いわく「脳が溶ける」そうだ。最近では昇進し、色々やる様になってきたそうです。

・多良鼓

１９８８年生まれ。熊本出身。アンパンマンになりたいと思って学を積んでいたら、大学一年で「たらこ」と名付けられた。たらこスパはバター入りが好き。

（↑）これでは読者は何のこっちゃか分かったもんじゃない、と思いましたので、オパーリンが少し補足します。多良鼓はアニメが好きだと言うので、記事を書いてもらう事にしました。僕の同級生です。この後、どの様な記事を書いてくれるのかは不明ですが、僕個人としては、アニメ業界についてそれが一般人の「世間」とどう関わってくるのか、という視点から彼には記事を書いていってもらおうと思っています。

編集後記

さて、みなさま長文の読解、お疲れ様でした。『月オパ12月号』はこれで終わりですが、いかがだったでしょうか？書いている側から言えば、分量的に先月号からさらに増えたので、作るのは結構時間がかかりました。月の初めから文章を書きためてたしね。

結果的に今月はたくさん文字を書く事になったのだが、書けば書く程また新しく書きたいことが思い浮かんできりがない。そういう正の循環が生まれるんだなあ、って実感した。その逆もまた然りで、やっぱ書かないとますます書けなくなるんだな。

ただ、校了直後の今、全精力を投入し、出し切ったので非常に疲れきっている。燃え尽きたやうなね。早いところ気持ちをまた来月に向けて切り替えていこうと思う。

読者からの反応があった事をこの場を使って報告しようと思う。「頑張ってください」とポストカードを送っていただいた。ありがとうございます。励みにして頑張ります。

それではみなさんまた来月、また来年、紙面でお会いしましょう。ごきげんよう。

(2011年12月20日 オパーリン)

パブー版あとがき

２０１１年、終わっちいましたね。２０１２年の始まりから１０日目に、この「月オパ ２０１１年１２月号 パブー版」を発行するに至った訳だ。つまるところ、僕が今年最初に発表した文章がこれ、という訳だ。

２０１２年が始まってから、読者のみなさんは元気にやっていたらどうか？まあ、別に心配はしていない。僕個人の話をすれば、自堕落なお正月を満喫し、早速企業説明会とやらに行ってきたり、新しく小説を書き始めたり、まずまず順調である。まあ、詳しくは来月号を読んでくれれば分かるだろう。

そう、今回このパブー版あとがきでは、来月号（２０１２年 １月号）の予告をしようと思う。１月１０日現在、多良鼓氏が既にもう原稿を送ってきてくれている。タイトルは「アンパンマンとキリスト教」。東町健太氏はまだ原稿を送ってきてくれないが、年始に会って飲み、来月号やこの雑誌の今後の展望などについて話し合ったので、近々原稿を送ってくれるであろう。

次に僕（オパーリン）の掲載予定記事について予告しよう。年末に小説を書き始めたので、それを連載コーナーに掲載予定である。タイトルは「生き恥を晒して足掻く、私かな」。あとは、まだ書いてないけど、書く予定の記事について、僕は書き始める時にタイトルを決める人なので、内容だけチョロっと予告しておこう。オパーリン王国の印刷革命について、オパーリン処女作品集「アダバナ」刊行記念記事、エヴァンゲリオンについて、小松左京について、東浩紀について、あとはエロ記事を２本ほど（これについては内容をいうと読む価値が減ると思うので内緒）。とまあ、大体こんな感じ。全部書けるか分からないし、書きたいことが色々出来てもっと増えるかもしれない。あくまでも現時点での予定、程度に捉えておいてほしい。まあ、読んでからのお楽しみだよ。むぶぶ。

そして予告編の最後に、特ダネをぶちまけちゃう。ああ、これを書ける日をどれだけ心待ちにしていた事か。よし、書くぞ。

１月号から、この月オパに４人目の執筆者が参戦する。その名は「弦楽器イルカ」。まずはイルカ氏について少し説明しておこう。弦楽器イルカ氏はこのパブーで執筆をしている作家さんである。その素性は僕も知らない。が、作家とは本来からしてその作品で評価されるべきものである。彼の作品を詳しく知りたい人は、（このあとがきを最後まで読み終わってから）このパブーの「作者検索」で「弦楽器イルカ」と打ち込んで読んでみてください。

で、その新企画について少しだけ教えてあげよう。まずタイトルは「お前、悩んでんだろ？」。不定期新連載としてスタートさせる。企画趣旨についても教えちゃおう。この企画は「悩み多き（と勝手に判断した）芸能人等のお悩みを（頼まれてもいないのに）愛情を持ってときに厳しく解決する」というものである。ちなみに、今回の被害者は・・・、まだ秘密だ。すでにイルカ氏は原稿を送ってくれているので、後は僕が今回の被害者の悩みを解決してやる記事を書けば完成である。どうぞ、お楽しみに。

また、イルカ氏はこの新企画「お前、悩んでんだろ？」以外にも、新作小説の執筆を準備して下さっている。こちらの方は、（１月号ではなく）書きあがり次第掲載する予定である。非常に楽しみにしている。

ちょっと、サービスしすぎたが、月オパ１月号の予告は以上である。パブー版下書きも以上である。「月刊オパーリン王国 ２０１１年１２月号 パブー版」読んでくれた人、どうもありがとう。じゃ、また来月お会いしましょう。（２０１２年１月１０日）

月刊 オパーリン王国 2011年 12月号

<http://p.booklog.jp/book/42136>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42136>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42136>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.